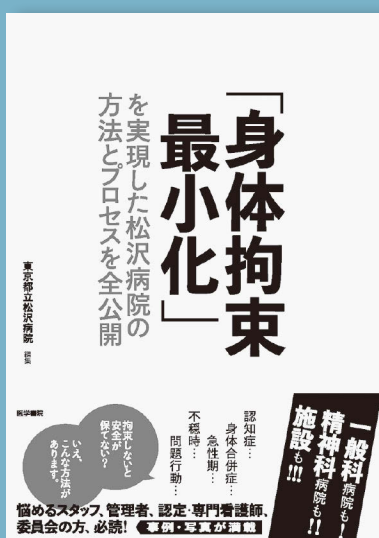


書評

「身体拘束最小化」を実現した松沢病院の方法とプロセスを全公開



- 編集 東京都立松沢病院
- 定価 2420 円 (本体 2200 円 + 税)
- 判型 B5
- 頁数 192
- 発行 医学書院

評者

石川県看護協会 会長
小藤幹恵

身体拘束最小化という願いを叶えるための歩みを示す

身体拘束をしないことが医療の中で普通になっていくことを願う人々にとって、今、既にそれを実現している医療の場は、強い関心を抱く対象となる。

本書を編んだ松沢病院が取り組んだ医療の先にあるものは何か。本書は、患者さんと医療従事者との関係性を、病院の目指すところに向けて発展させた、具体的な実践である。「私たちはこのように生きたい」「このような社会で暮らしたい」という、医療の根底にある願いを見つめて行動した、医療チーム、患者さん、家族の物語である。ここに描かれている実践には真に迫る^{すごく}凄みがある。

本書に示された、人への畏敬の念とその実践

今日この進歩した社会をもってしてもいまだ「身体拘束」にはさまざまな状況があり、取り組みの産声を上げることさえはばかれるときもある。本書には、松沢病院のように多数の専門職によって構成される大規模な病院がこれに取り組むことについての、不安、恐怖、苦難とその先にある諸事への対応など、立ちはだかる壁の姿も具体的に示されている。壁の明確化は身体拘束低減への扉を開く。そして、社会にとって大切なものを伝える。

例えば、「先生（病院長）の怒りは、患者さんの気持ちを代弁した態度」と受け止める域にある看護師長と、その思いを着任当初からの日々の中で醸し出す病院長という、リーダーの姿があったことに心打たれる。

身体拘束最小化に取り組んだ歳月に一貫して流れているのは、人々が共感し合う様子と、目指す医療に向かうパッションだ。本書に示されている、人への畏敬の念とその実践は、医療に携わるという点で土俵を一にする私たち読者に、願いを叶えるための歩みを示し、勇気と慎重

な準備に基づく行動を喚起するものと言える。

中でも、専門領域の違う医師たちが、目の覚めるような発想の転換に基づき、患者を中心に連携した様子は、身体拘束最小化を含めた新たな医療モデルと言え、その内容が記されているのは本書ならではのと思われる。

貴重なケアの実例がアイデアのリソースに

本書では、多くの素晴らしい言葉に出会う。「自分の意思、選択に加え、自分の足で入院する」「動かないでいてもらうことは援助ではない」「入院時は身体拘束ではなく、会話を」など、読者自身も知っている何気ない状況が、捉え方によって意味と輝きを増すという発見がある。また貴重なケアの数々が写真も用いて示され、参考となりアイデアのリソースにできよう。

筆者も身体拘束をしないことの効果・成果を問われることがある。本書の中でも、「患者さんにとっては拘束されないことが普通で当たり前である」ということについて、医療従事者間で認識にズレがあるかもしれないと述べられている。病院長の方針と院内の取り組みが、このようなことに気づいていける環境を作り上げていっている。

そして、「身体拘束をしないこと」が継続できている理由として、心に沁みる医療や看護の姿が描かれている。身体拘束をしないことによって“神業”とも言えるようなことが起こっている様子、医療が希求する情景が、映し出されている。本書を手にし、読み進めることで、困難が多いものと受け止められがちな“身体拘束をしないこと”が一步進めば日常の幸せがひとつ増えることを、ぜひ実感していただければと願う。